

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：57501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520042

研究課題名（和文） フッサールの後期還元思想の解明

研究課題名（英文） The explication of Husserl's late reductive thought

研究代表者

堀 栄造 (HORI EIZO)

大分工業高等専門学校・一般科文系・教授

研究者番号：50229209

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代ドイツ哲学の主潮流の一つを成す現象学の創始者エドムント・フッサール（1859～1938）の1913年から1936年までの後期還元思想がどのように展開されたのかを、或る程度明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has explicated in some degree how the late reductive thought from 1913 to 1936 of Edmund Husserl (1859～1938), who is the originator of phenomenology which constitutes one of the main tides of modern Germanic philosophy, was developed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学

## 1. 研究開始当初の背景

フッサール現象学における還元思想の展開について、縦断的に一貫した研究は、従来

なされていなかった。本研究者は、フッサールの前期（1880年代～1901年）・中期（1901年～1913年）の還元思想について究明した成果である拙著『フッサールの現象学的還

元』(晃洋書房、2003年)を踏まえて、フッサールの後期(1913年～1936年)還元思想を解明しようと試みた。

本研究者は、そもそも30年余り前にフッサール現象学研究を開始して以来10年間くらいは、もっぱらフッサール後期現象学の研究を続けた。したがって、その研究成果は、フッサールの最晩年の著作『ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学』(『危機書』、1936年)についての研究である「ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学」(修士論文、熊本大学、1981年)や、1920年代から1930年代までのフッサールの後期思想についての研究である「フッサールの後期思想」(修士論文、筑波大学、1988年)として結実した。さらに、「後期フッサールにおける生活世界のアプリオリ性」(筑波大学哲学・思想学会編『哲学・思想論叢』第4号所収、1986年)、「フッサールの後期思想の立脚点としての「第一哲学」」(筑波大学哲学・思想学会編『哲学・思想論叢』第6号所収、1988年)、「脱現実化的現実化の徹底化としてのフッサールの後期思想の展開」(筑波大学哲学研究会編『筑波哲学』第1号所収、1990年)、「現象学的心理学の形成と確立」(大分工業高等専門学校研究報告第27号所収、1991年)といったフッサールの後期思想に関する研究論文も生まれた。その後、本研究者は、フッサールの前期・中期還元思想を研究し、その成果は、「フッサールの現象学的還元の研究」(博士〔文学〕学位論文、筑波大学、2006年)として結実した。さらには、拙著『フッサールの現象学的還元—1890年代から「イデーI」まで—』(晃洋書房、2003年)や拙著『フッサールの脱現実化的現実化』(晃洋書房、2006年)も生まれた。

そこで、本研究は、そうした長年に渡る本研究者の研究を踏まえて再びフッサールの後期思想へ立ち返り、近年続々と刊行されているフッサール全集の遺稿等の新資料に基づいて、フッサールの後期還元思想の展開に関する従来の本研究者の研究によって大枠組として把握された各里程碑の間の谷間を埋める精細な研究を遂行した。それゆえ、本研究者は、フッサールの前期・中期還元思想の研究を通じて獲得された「脱現実化的現実化」という観点、つまり現象学的還元という哲学的方法の目的を「実在的現実を脱却することによって真の現実を捉えること」と把握し、現象学的還元という哲学的方法の形成過程において哲学的成果として獲得される真の現実を究明するという観点を駆使しながら、過去に積み上げられた財産であるフッサールの後期思想の展開に関する本研究者の研究を深化させて「フッサールの後期還元思想の解明」を企図した。

## 2. 研究の目的

本研究は、フッサール現象学における後期(1913年～1936年)還元思想の展開を解明することを目的とした。

現象学的還元は、ドイツの哲学者エドムント・フッサール(1859～1938)が創始した現象学という哲学の学問的方法である。現象学的還元とは、自然的態度の一般的定立の徹底の変更のことだ、と通常は理解されている。つまり、我々が日常生活の中で自然的態度を取っているときには、我々は世界や世界内の諸事物の現存を素朴に信じているが、現象学の方法たる現象学的還元は、世界や世界内の諸事物の現存の定立を遮断し、定立作用および定立内容を保留状態にして、定立作用たる主観性と定立内容たる客観性の相関性としての認識論の本質を純粹かつ中立的に捉えるのだ、ということである。そして、世界や世界内の諸事物の現存の定立の遮断は、現象学的エポケー(現象学的判断中止)と呼ばれ、現象学的分析を行う場合に現象学者が自然的態度から現象学的態度へ自己の態度を変更することは、現象学的態度変更と呼ばれる。したがって、現象学的還元とは、現象学者が現象学的エポケーや現象学的態度変更を行使することによって、日常生活における自然的態度では捉えられなかった認識論の本質つまり主観性と客観性の相関性を捉えることだ、ということになる。

こうした事は、抽象論としては理解しうるけれども、具体的にはどういうことなのか。つまり、我々が現象学者として実際に現象学的還元を遂行する場合に、我々はどういう具体的な操作を行うのか。現象学的還元をめぐる従来の諸研究においては、国内外を問わず、現象学的還元の際の具体的な操作についての徹底的究明が欠落していた、と言わざるをえない。したがって、現象学的還元の遂行の際の具体的な操作つまり現象学的還元の具体的な内実を徹底的に究明することが、本研究者の従来の研究の枢要な目的であった。それは、拙著『フッサールの現象学的還元—1890年代から「イデーI」まで—』(晃洋書房、2003年)によって果たされ、1890年代のフッサールの還元思想の初期段階(フッサールの前期還元思想)から『イデーI』(1913年、フッサールの中期還元思想の主著)へ至るフッサールの還元思想の展開における現象学的還元という哲学的方法の形成過程が究明された。しかし、前著においては、現象学的還元という哲学的方法の形成過程において一体何が哲学的成果として獲得されたのかということは、未だ明確にされてはいなかった。そこで、拙著『フッサールの脱現実化的現実化』(晃洋書房、2006年)においては、現象学的還元という哲学的方法の目的を

「脱現実化的現実化」つまり「実在的現実を脱却することによって真の現実を捉えること」と把握し、現象学的還元という哲学的方法の形成過程において哲学的成果として獲得される真の現実が究明された。つまり、この拙著によって、現象学的還元の形成過程における脱現実化的現実化の段階的進展および脱現実化的現実化の段階的進展に応じてその所産として獲得される現象学的認識論的本質たる真の現実の段階的進展が究明された。

本研究の具体的な目的は、まさに、フッサールの中期の主著である『イデー I』(1913年)以後のフッサールの後期還元思想の展開を徹底的に究明することである。超越論的現象学を看板に掲げながら至る所で現象学的心理学が展開された『イデー II』(1912年から1915年にかけてかなりの部分が執筆された)において現象学的心理学は半ば無自覚的に遂行されるのだが、『第一哲学』(1923/24年)までに成熟していき、1920年代の発生的現象学における現象学的反省の変容を推進する。『第一哲学』において現象学的心理学から超越論的現象学への移行が明確に体系化された時点では、個別的心理学的還元を擁する現象学的心理学は普遍的超越論的還元を擁する超越論的現象学へ至る踏み台としてしか考えられず、現象学的心理学から超越論的現象学への方向性のみが考えられていた。しかし、『現象学的心理学』(1925年)において現象学的心理学が発生的現象学として存立し、『ブリタニカ草稿』(1927年)において超越論的現象学と現象学的心理学の等価の並行論が確立されることによって初めて、超越論的現象学と現象学的心理学の相互通行性が考えられるようになる。1930年代になると、相関する志向的生と世界の生々しい具体化によって、現象学的反省は、反省対象としての空想カプセル内の空想世界の内容を具体的で事実的かつ現実的な生活世界となし、「脱現実化的現実化の徹底化」を成就する。『デカルト的省察』(1931年)において「日常生活」が現象学的射程のうちに導入され、相関する志向的生も世界も生々しく具体化される。そして、『ヨーロッパの諸学の危機と超越論的現象学』(1936年)の時期になると、世界概念の極に達した生活世界の主題化が、現象学的経験の領野を具体的に豊かなものにするとともに、現象学的経験は、発生的現象学的反省の手法としての変更(ヴァリエーション)によって「真の現実化」を徹底化することになる。それゆえ、本研究は、フッサールの前期還元思想および中期還元思想の解明という意義を担うこれまでの本研究者の研究成果を発展させて、前述したような1910年代半ばから1930年代半ばへかけてのフッサールの後期還元思想の解

明を企図した。

### 3. 研究の方法

本研究は、世界の現象学研究の総本山であるルーヴアン大学付属フッサール・アルヒーフでフッサールの未公開遺稿等の貴重な資料を収集したり、フッサール全集の刊行の近年の進展に伴って公になったテキスト等を解読したりすることによって、研究を推進しようとした。

2009年度は、『時間意識に関するベルナウ草稿(1917/18)』等を解読して、『イデー I』(1913年)以降の1910年代のフッサールの後期還元思想を究明する計画であった。また、他方で、世界の現象学研究の中心であるベルギー国ルーヴアン大学フッサール・アルヒーフで未公開遺稿等の諸資料を閲覧し、貴重な研究資料を獲得する計画であった。本研究は、順調に進展し、上掲の著作等の解読も進み、フッサール・アルヒーフでの貴重な研究資料の獲得もなされた。獲得された貴重な研究資料の中でも、とりわけ未公開遺稿 BII 11『エポケーの変化(1933年または1934年)』や未公開遺稿 BII 12『現象学的考察による自然的生の変化(エポケー)(1935年)』等が、本研究者の関心を引いた。

2010年度は、『イデー I』(1913年)以降、現象学的還元というフッサールの哲学的方法によって主題化され解明される現象学的本質が、フッサールとその弟子たちとの議論等によってどのように変容を遂げるのかを究明する計画であった。つまり、フッサールを中心とする現象学派の学術誌『哲学および現象学的研究年報』第4巻(1921年)に掲載されたフッサールの弟子ジャン・エランの論文「本質、本質性および理念に関する注解」等を解読しながら、フッサールが1917年頃に「プラトンのなアイデア(理念)としての本質」から「アリストテレス的なエイドス(形相)としての本質」へと現象学的本質を転換していったのではないかという問題を究明する計画であった。そして、その計画は、順調に達成された。

2011年度は、フッサール全集第33巻『時間意識に関するベルナウ草稿(1917/18)』

(2001年)に基づきつつ、1917/18年時点のフッサールの「個体化の現象学」を究明する計画であった。さらに、本研究は、フッサール全集資料集第4巻『自然と精神 1919年夏学期講義』(2002年)に基づきつつ、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論を究明し、フッサールの最晩年の『危機書』

(1936年)における学問論との対比において、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論の意義を究明する計画であった。そして、

その計画は、順調に達成された。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、2009年度において、フッサールの最晩年の集大成の著作である『危機書』(1936年)の前夜とも言える1933年から1935年へ至る時期に執筆された草稿に基づいて、『危機書』で取られる超越論的現象学へ至る二つの道つまり「存在論を介しての道」と「心理学を介しての道」の1934年時点での胚胎、1935年1月時点での「最晩年の超越論的現象学的本質把握の方法としての超越論的想起」、1935年秋の時点での「最晩年の超越論的現象学的本質把握の具体的操作としてのヴァリエーション」等について解明した。

(2) 本研究は、2010年度において、『イデーオンI』(1913年)のフッサールの現象学的観念論が『イデーオンII』(1912年から1918年へかけて執筆された草稿)において「自然と精神」という実在を主題とする実在論的傾向を帯びた叙述へと「実在論的転回」を遂げることを指摘し、それは、1913年夏学期以降の弟子たちとの仮借ない批判的な議論による啓発、とりわけジャン・エランの説く「個体としての本質」の啓発によるものである、ということを知明した。

(3) 本研究は、2011年度において、個体化は、「或る唯一のものであるような個体化する契機」と「エイドスとしての本質」との一体化によって成立するものであること、ベルナウ草稿における「個体化の現象学」は、純粋な理念的可能性の次元で遂行されたフッサールの従来の実在的存在論に対して、経験的な事実的現実性の領域を開示したこと、ベルナウ草稿は、個体としての対象の認識を中核とする具体的事実的な経験および現実的な経験的世界に基づいて抽象的理念的な認識および可能的な理念的世界を現象学的に基礎づけるというフッサール後期思想の基軸を樹立する大転換点だと言えること等を解明した。さらに、本研究は、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論が、可能的諸学問をアポステリオリな経験的諸科学とアプリオリな形相学としての領域的存在論に区分し、前者の骨格を成す後者を現象学によって超越論的に基礎づけることによって、厳密な学問体系の創立を企図するとともに、物的自然の存在論および現象学の基本路線に関して、具体的事物ファントムの存在論を中核とする「超越論的感性論」の導入によって、「存在論と現象学の架橋」を学問論的分析として具体的に遂行したことを解明し、

さらに、1919年夏学期講義「自然と精神」における学問論は、『危機書』(1936年)の学問論の原型を成すものであり、学問論的転回点としての意義を担うものであることを解明した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 堀 栄造、「フッサールの学問論的転回点」(筑波大学哲学研究会編『筑波哲学』第20号、2012、頁数は未定)
- ② 堀 栄造、「フッサールの実在論的転回」(筑波大学哲学研究会編『筑波哲学』第19号、2011、pp.16-30)
- ③ 堀 栄造、「フッサールの『危機書』の前夜」(筑波大学哲学研究会編『筑波哲学』第18号、2010、pp.1-15)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

堀 栄造 (HORI EIZO)

大分工業高等専門学校・一般科文系・教授  
研究者番号：50229209